

利潤の追求と、自由と平等の關係について

(一)

最近フルシチョフは、公然とソ連の各企業が利潤追求に關して、「資本主義により多く学ばねばならぬ」と言った。彼はマルクスの利潤を無くさねば眞の自由も平等もないと言う忠告を棄て去ってしまったようだ。やがて彼は、利潤を社会行動の最高指導力の王座にすえれば、必然的に経済的進歩をもたらし、その結果として自由と平等の社会が現われると言ひ出し兼ねないようだ。

幸せな事に、利潤動機や利潤追求は、昔から人間の行動のおもな動機の一つであった。もっとも資本主義前の社会では利潤の追求は社会秩序をこわすものであり、社会の進歩とは

無關係なものであるとして、個人の経済生活を意識的に狭い範囲に限定していた。だから利潤動機を認めれば、自由平等の社会がおのずから現われると考えて、これをその手段として積極的に評価し、最初これを規範に祭り上げたのは資本主義である。

誰でも知っている様にフランス革命が、それまでに長い間かかって徐々にくずれ初めつつあった都市や農村の社会協同体に、最後のとどめを刺すために、「法律の前での個人の平等」を宣言して以来、個人の利潤追求は無制限に解放された。経済活動は経済外の諸活動の上位にあるべきであって、下位に置かれてはならない社会のあらゆるエネルギーは経済的自由の推進に集中されねばならないのだから、経済の下部機構である法律や道徳などはどんな踏みじられる。と言うのが現実である。なぜなら、資本主義的経済的進歩は、資本制理想社会実現の大切な約束を荷っているからと言うのである。なんと資本制社会のイデオロギーが、マルクスの有名な経済ファシストのそれと似ていることだろう。こんな処に最近のケネディ、フルシチョフの核実験協定の真因の一つを見るのは私のひが眼だろうか？

さて、前述の立前から、資本主義がそれによって自由と平等と言う大切な社会目的を打ち立て得ないならば、資本主義は意味もなければ存在の理由もない。この理念の具体的意義を最もはっきりとつかみ取るためには、崩壊末期の社会共同体の中で生活していた、資本主義前期のヨーロッパの農民や市民の、物すごい反逆運動の歴史を一言でも読むことだ。英国のラッタイトの反乱、シレジャの麻業者の反逆、一九〇六年ストルイピン改革後のロシア農民

の怒りー経済的自由と平等の進歩のためと云う立て前で、ロシヤ村落共同体を個人所有に轉換した改革ーなど、どれ一つを取っても、これらの反抗を時の権力者達が抑圧する事が出来たのは、資本主義によれば平等と自由になれると云う約束を、権力者たちも頭から信じていたからであった。

この約束がむだであった事をわれわれは皆よく知っている。経済上の進歩は、平等どこるか機會の均等と云う形式的な平等すら、もたらさなかった。その代りにとてつもないプチブルジョア階級が出現した。プロレタリアがこの階級に入りこむのは実にむづかしいことであった。現在、産業社会の各階級はほとんど家族相伝である。戦後、日本では多少これと相違して下層階級出身の荒事師が、企業面でパロディを演ずる余地があったが、それも消えうせた。ただ娯楽が企業化された現在、中間層の大衆の中で、身についた才能にめぐまれた少数のものだけが、その世界内でプチブルジョアに転身しているだけだ。

(二)

資本主義のもたらした物的進歩にも拘らず、資本主義では真の自由はおろか、資本主義的自由すらも守られなく、しかもその無い処に機會の均等すら得られない為に、制度として

の資本主義に対する信念がくずれたのはヨーロッパではすでに久しい。EEC問題などの生起したのは、そのみじめな打解の一表現に過ぎないが、日本の様に大規模一貫作業方式の大企業が、ようやく始ったばかりの国では、それが社会的に独占化であるにも拘らずー資本主義から自由競争の信念を消す事は出来ないからー能率が増進しさえすれば、機會の均等も社会的地位の平等も促進されると思ひこんでいる無知がまだ普遍的である。特にだらしのないのは、労働運動である。組合執行部のがらくた共は、資本主義と対立するどころか、資本主義内部に安座する為の、自分達の政治経済的地位獲得運動をやっているにすぎず、そのため日本資本主義は一時的小康を獲ているように見える。しかしそれも、戦後独立を闘い取った植民地諸国のテンポの早い近代機構を取り入れた産業が、先進資本主義国の産業に追いつくまでの一時的現象である。

これを別の方面から見ると、日本では、この一時的現象を永続的なものと見る下層中流階級の親達は、自分らが獲られなかった資本主義的自由と平等を子供達に享受させる為に、ひたすら子供を大学に入れたがっているーとなる。しかしユゴのレ・ミゼラブルを読んだ人は、ヨーロッパ資本主義が当時、すでに大学卒業生を墓堀り人夫位にししか使用出来ないほどに行詰っていた事、又、前述の娯樂の世界を見ても、スターを抹殺せんとする若者達の狂暴さは何を物語るか。かかる男女の親達は、自由職業ー資本主義経済の領域外にあると思っているーによって資本主義的自由と平等にたどり着く事が出来ると思っている。これは実

業界に止まる限り拒まれている平等と自由への道が、八方ふさがりだとの絶望的表現ではないか。

しかし、ヨーロッパにおいて資本主義的自由と平等の約束に向けられた信頼のくずれ方がどれだけ激しかったか、を決定的に示す重要な事実は、もっと別の所にある。それは、ヨーロッパの労働階級が、マルクスの「大衆の窮乏化」と言うテーゼを絶対的真理として受け入れている事である。労働者の経済的実情を見ても、H・リード等が云っている如く、このテーゼが間違っている事は明らかである。しかもこの命題に対する労働者の信念はゆるがない。労働者にとっては、事実よりも、この命題の意義が彼らの主観にあるからだ。労働者はますます不平等になると思ひ込む事、プロレタリアから浮び上る機会は永久に来ないと思ひ込む事だ。資本主義の印象としてはこれは全く正しい。

資本主義に対する前述の信念が誤りだと決定的に分ったのは何時か、はっきり決める事は勿論出来ないが、ヘンリ・フォードが大量生産方式こそ最も経済的で能率の高いものである事を示した時、資本主義の信仰が全く意味を失ったと云う事は出来る。この方式がとられてから、英国やフランスなどにも今だに可成り存在している小規模企業との対比において、いままさる不平等が如実になった。しかし、もしヨーロッパに以下に述べる二つの要因がなかったなら、資本主義を支持する考え方はもっと早く消えていたであろう。

その一つは、一九世紀の経済的帝国主義である。これによって中流階級が海外進出と富を

獲る機会を得た。クロボトキンがこれを見落した事は残念であった。しかしこれは要因として決定的なものではなかった。最も重要なものはアメリカの存在である。

アメリカが、ヨーロッパの資本主義と形式的民主主義とを勝利に導いた影響は、計りがたいたいものがある。その昔、独立宣言と憲法がフランス革命に与えた影響、シェファソンの民主主義が英国の自由党生誕に与えた影響、新教徒に与えたもの、ハミルトンがビスマルク時代のドイツに与えた直接の影響など、その著しいものだ。しかし、一九世紀後半このかた、資本主義に与えたアメリカの、目だたない、間接の支えに比べれば、これらの歴史的事実はなんでもない。ヨーロッパの大衆が、経済上の自由を通じて平等と自由に至ると云う夢が破れた事をようやく悟り始めた当時、真に自由、真に平等、真に民主主義的な無限の可能性をもつ国があると云う事は大きい事であった。大衆にとっては、自分達の国ではその信条が幻滅に帰したとは云え、間違ったものではないと云う証拠になった。貧しい新聞売子が百万長者になったとか、丸太小屋の少年が大統領になったと云う出世物語は、アメリカ大衆の云い伝えである以上に、ヨーロッパ大衆に親しまれた。ヨーロッパのどんな貧しい農夫でも、当時アメリカでは土地がたたと云う事、地主と云うものが無いと云う事を知っていた。ヨーロッパ資本主義の安全弁として、その生きた見本としてアメリカの持つ意味は重大無比であった。一九世紀にアメリカ移民が出た頃の人種的な、又地理的な経過は仲々おもしろい。日本人の移民は、最後のどん尻り位にあたるが、それでもなお、自分らの祖国では手に入れるすべ

もない自由と平等とを求めてアメリカへ渡ったのであった。

ヨーロッパ資本主義に対する理念上の支えとしてのアメリカは、第一次世界大戦直後を絶頂として衰退し初めた。殊に一九二九年のアメリカ経済の破綻は、致命的であった。それにしても平等の国アメリカの魅力は今でもまだ残っている。これは独裁主義者がアメリカは激しい階級斗争の国で、下層階級はひどい圧迫を受けている国だ、と大衆に思い込ませようとする努力にも表われている。あのニューディール時代にその成り行きを知識階級の者達が如何に熱心に見守ったかにも表われていた。しかしヨーロッパでは資本主義の信念はすでに何者をもって救うすべもないまでに解体した。資本主義では、平等も自由も、もたらし得ない事は、疑う余地も考えなおす余地もないほどに証明された。経済的成功とか繁栄とか、また物質的進歩などと云う事で、ごく一部のには資本主義の信仰がどれほどくずれたかも隠せるかも知れない。しかし資本主義的信条をよみがえらせる事は出来ない。結末を長く延ばす事すら出来ない。

資本主義は激しい階級斗争を必ず起す。社会主義には階級斗争の原因をなす階級はない筈だったが、それはうそだと解った。資本主義的信条も社会主義的信条も共に失敗に終った。人が経済上自由にふるまえば、自然に理想的結末が来ると云う考えが間違っていたからである。

この失敗が一番はっきり現われたのは経済分野であった。もちろん政治上でも色々の制度

がこのために無意味に終った。しかしその一番深刻な影響は、社会の基礎をなす根本的な人間の考え方にかかっているものである。人間の本性と、社会において人が持つ役割と位置についての考え方に及ぼす影響がそれである。人間の経済上の自由は、自然に放任しておこうが、弁証法の説明によろうが、平等に導くものではないと、はっきり分った事だ。これが分ったから、資本主義と社会主義との共通の基礎になっていた人間の本性についての考え方そのものが、ガラガラと崩れた。ホモ・エコノミクス（経済人）と云う概念がそれだ。

(三)

どの社会にも必ずその社会はどうあるべきかを決定する一人間活動の全分野を規定すると思われる一動かすことの出来ない通念、或いは概念があるものである。中世には神の遍在がそれであった。男も女も労働者も金持もすべて、この根本通念を信じて疑わなかった。

ヨーロッパでもアジアでも古い氏族制度が崩れた後、大衆の経済生活は、必然的に相互連帯的な社会共同体の中で行われていた。支那では、これを「社」、朝鮮では「契」、日本では「座」、ヨーロッパではギルドと呼んだ（ここでは便宜上、ギルドと称する）。ギルドの中では利潤追求は道徳的に強く抑制されていた。といっても、ある相当量の貨物を遠隔地

へ送る場合、ギルドに委託すれば、約束の日に、約束の場所へ少しもたがれず届いた記録が山積している（日本政府の郵便制度下で近來頻繁な貨物の紛失事件を想起されたい）。ギルドでいかに信儀を重んじたか―これを裏返せば、中世の社会では、経済的な利潤追求は社会の進歩をみだすものとして、ひたすら遍在する神にすぎたからである。

従って、経済的人間よりも宗教的人間が尊重されていた。例えば、十一世紀にイタリアのシエナで、ローマ法王は銀行家や高利貸しを対照にして「キリスト教徒は借金を支払う必要はない」という布告を出した。又、昨夜、女を後から犯しましたと涙を流して懺悔した金持ちに、教会は彼の財産の半分に値する免罪符を売りつけた、というれっきとした記録も残っている。

これに反して十八世紀以後の近代資本主義社会では、なによりも経済が第一であり、人間を経済的動物なりとする通念が基礎になっている。資本主義も社会主義も共に自由奔放な経済的人間活動の中に、社会目的を実現する道があると信じて疑わない。もともとマルクスが修正した改訂版の経済的動物―人間は自から望むものではなく、いわゆる「階級の利益」のために行動する人間ということになっているが、ソ連が最近発表した統計では、コルホーズ内部での個人農業の豚、鶏などの昨年度の生産高は、全コルホーズ生産高の四六％だということから、ソ連農民が階級の利益を自分の利益に優先させているか、どうかは眉つばものである。また、去年の党中央委員会の報告でも、アゼルバイジャンのコルホーズでは、牛の頭数増は

三％、個人農業のそれは八％、ジョルジャでは前者は十三％、後者は三〇％、そのために一部のコルホーズでは個人農家から牛を買い政府の要請に応じた、とあるから、この意味では形式上の「階級の利益」は守られたことになる。けれども、フルシチョフは年々増加する、かような水増し報告をするコルホーズや工場ボスの重刑を科する法律を成定したから、うかつに形式上の階級の利益も守られないことになった。

ばくはなにもソ連の悪口を言っているのではない。ただ、中世において神を瀆した者を火あぶりの刑にしたように、近世では、資本主義でも社会主義でも共に、経済を攪乱した者、例えば、またまたソ連で恐れ入るが、ドルの密売買は死刑だということを考えると、人間は経済的動物だという通念の浸透度の深さに驚くばかりだ。

この概念をもとにして、経済学を科学に祭り上げたのは、いうまでもなく、アダム・スミスだ。経済学が科学となるためには、如何にそれが非経験的で独断的なものであっても、自然科学（純粋に経済的で独断を許さない）と同様に、「因果方則」が是非必要である。そのためにホモ・エコノミカスという概念が先ず入用だ。その概念内容は、多少ずるくて、小利巧で、しかも人間を幸福にする道を知っていると自称する図々しい奴を意味した。

自然科学の場合には、多少の例外、例えば蛇が普通の脱皮期に脱皮しないというような例外は許されるが、その概念のあいまいさから、経済学の場合には少しの例外も許され得ない。例外こそが最も重要な要因となる。例えば独占は生産を減じ、値段を高めるといふ厳然と

した経済法則があるにも拘らず、その法則を知らなかったヘンリー・フォードが、これまでよりも多く、これまでよりも安く生産しながら、独占に成功したとき、古典経済学の全体系が崩壊してしまった。

種々なる矛盾や不幸が続発した。それらをカバーして、あたかも、資本制社会が一人歩き出来るような見せかけの印象を人々に与えるために、ケインズだのマーシャルなどの経済理論がよろめき出た。だが経済学の一人歩きは不可能だった。なせならば、もし経済学がそれ自体の道を一人歩きできるならば、今更、彼女は国家のメカケになり下る必要など毫もないからだ。

われわれは帝国主義的資本制社会を積極的な発展的な社会体制とはみない。EEC問題などの発生は、その苦悶の政治経済的表現とみる。

一見したところ、経済学が今ほど重大視されている時代はないようにみえるが、それは、現実の出来事が経済学の原則通りにうごいていてと誰でもが信じているからである。日本などでは、経済専門家と自称している奴に国の政治すら任せている。経済学者は大学の講壇、議会の演壇、テレビの解説者として、大もてである。しかもこれはみせかけにすぎない。

真相は経済人の社会を救うための絶対絶命のあがきとして、経済学者を重要らしい地位に付けたに過ぎない。これは十八世紀に哲学者、合理主義者、歴史に明るい賢人を危険な王座にすえたのと同じである。十八世紀の哲人達が重大失敗をしたように、二十世紀の経済専門家と

自称する先生方が失敗するのは、火をみるよりもあきらかだ。

経済学者は力強いように見えるが、現実の出来事は、経済学者が絶対にありうべからざる事だと断定したことが、全く逆に現実となっていることは注意することである。例えば金本位制は決して廃止しえないと経済学者は断定した。その口の端のかわかぬうちに、それは完全に廃止された。又、双務貿易協定は絶対に成立しえないと、その該博な経済知論をもって論じたドイツのシャハト博士は、現在、日本がソ連や中共とどんな貿易をやっているかを見たとなれば、どう思うだろうか。この事は、中世初期の教会時代の奇蹟が、現代の物理学者にとってありうべからざることだというのと同じである。

(四)

人間はヨーロッパでもアジアでも、自由平等を初めは精神界に求めた。天国では人はみな平等であること、天国における運命を、現世の所業と考えてきめるのは、人間のおの自由であること、言わば現世は真の生活の準備にすぎないこと、こういう教義が、大衆を押さえる手段にすぎないと云うのが、十八世紀の社会やマルクス主義のいうところである。この時代は前述したように人間を経済人ではなく、精神人と見、精神人と考えた。世界におけるそ

の位置、社会におけるその位置を、精神上の秩序における位置と見た。こうして神学は精密科学になった。

この秩序が崩壊したあと、自由平等は知的分野に投影された。ルーテルの教義は、人はその自由で平等な知性によって聖書を解説し、これによってその運命をきめるものである。こういう教義はほかに類がないわけではないが、知識人の秩序を現わすものとしてはよい形体である。この秩序が崩壊したあと、自由平等が社会に投影された。人間はまず政治人となり、ついで経済人となった。自由と平等は、社会的また経済的自由、又は平等となった。人間の存在を証明することもまたその理由も、社会的、経済的秩序の中に見いだされることになり、人間の本性は、この秩序にあることによってきまるものとなった。

マルクス主義では、こう云う世界観がその極致に達している。そこでは、経済分野のなかで、これを通じて、自由と平等にたどりつけると云う信念が再宣言される。この宣言は、同じ目的を持つ資本主義が失敗に終わったことにその根拠をおいている。マルクスは、階級斗争の現実から階級のない社会をひき出したが、この階級斗争なるものは、資本主義の云うような経済分野の調和では平等が得られないことを現わす。民主主義は形式だけで不平等はそのままだし、だから本当の自由平等の社会が間近にあることを証明する。大衆の「ますます激しくなる窮乏化」即ち不平等は厳然と居すわる。歴史は、みな階級斗争の歴史であるから、どの歴史もおもむくところは階級のない社会であることが証明されている。

マルクス主義はヨーロッパで編み出された一番根拠のある教義の一つである。資本主義が続く限り、マルクス主義はその鋭い批判者になっているが、しかしマルクス主義は、自由の概念の弁証法的遊戯にたよりすぎて、自由を全く放棄しそうな処まで来ている。マルクス主義が本当の自由を社会の終局目的としたのは、ブルジョア資本主義と同じである。それが資本主義に反対するのは、資本主義では実現されない自由を大事にするからである。しかし社会主義の国では、人が自由になれると証明するためには、資本主義社会では人は現に自由でないと云うだけでなく、自由になる能力さえないのだとしなければならなかった。社会主義の約束は、経済原則に自動性（これこそ重要な弁証法的性質の一つであるが）を認めるからこそ出来るのである。この自動性によって、人は意志の自由を奪われ、それぞれの階級のあり方にしたがうことになる。即ち、非自由。これこそカルヴィン主義における現実の自由と完全なる宿命論との対立に見られるような、大胆きわまる神学思索の一節である。実にマルクス主義は理知的にも理念的にも、又その歴史的役割においても、ひどくカルヴィン主義に似ている。

マルクスは、経済原則のこの「自動性」を上位に置き自由を下位に置いたことで、その宗教的な力を大いに強めた。これによってマルクス教義は必然となり、最後の勝利が確実になり、知的にも安心して受け入れられる断定性を持つことが出来た。この自動性がなかったら、社会は歴史上常に階級斗争の社会であったから階級のない社会が来るとか、最大の不平等が

眞の平等をもたらすと云うようなことは、信じろといっても無理であろう。しかしその宗教性のためにマルクス主義は独断的で弾力性のないものになった。

マルクス主義の知的緊張度はきわめてきびしくて、その組石の一つ一つに触れば全殿堂がくずれ落ちるほどのものである。マルクス主義を組立てているものは、目的としての自由をすてるか、または自由達成の約束をすてるかしなければ、これを変えることが出来ない。こう考えれば、なぜマルクス主義の信条があれほど面白いものであったかが解る。自由平等の社会主義社会が、はたして達成されるだろうかと云う疑いが起り始めるやいなや、マルクス主義の信念が急速に解消した理由はここにある。

資本主義を自由平等達成の手段とすることが誤りなことは、ヨーロッパでは一八四八年までに分っていた。一方社会主義は一九世紀の終りまで教義として有力な地位に上れなかった。ドイツ労働者が初めて選挙に大勝してから一九三二年に、あっと云う間に消えてなくなるまで二十五年間もたっていない。それはドイツ労働者が、その背後に国民半数の支持を受けていながら、自分達が法律にしたがって選挙した政府が、根こそぎ崩壊してゆくのを黙って見ていた時のことである。しかもその反対党たるや、ヒットラー政権以前の誠に無力な、フォーン・パーベン政府で、かれらには軍部といわず警察といわず、だれの支持もなかったのである。それから一、二ヶ月たたないうちに労働者達は、その数十年の辛苦によって成就した社会民主党（ドイツでは左右派ひっくるめて共産党のこと）を、ことごとく破壊されるのを甘んじてうけた。

マルクス主義が教義として崩壊すると共に、経済分野を主権的、自主的な基礎とする社会はその妥当性を失い、理性を失う。自由と平等とは、こういう社会のうちでは実現されないからである。資本主義と社会主義の古い秩序はよみがえることが出来ず、またこれ以上の展開も望めないほどに解体してしまった。

ある人々はいうかも知れない。アジアでは中国で社会主義秩序がよみがえっているのではないかと。しかし、それは永く歴史の中で窮乏化され、無知をしいられ、抑圧され、搾取され続けて来た無数の中国の大衆を基盤にして、上から打ち立てられた社会である。上から打ち建てられた社会が、自治的な構造を持った社会になることは出来ない。イデオロギイ的な上部構造の中で行われた革命は、自治的構造の社会に取って替ることに必ず失敗する。なぜなら、中国で革命が成功したのは、抑圧され、無知をしいられて来た大衆の、深い無意識下にひそんでいた古い社会共同体に対するあこがれと、近世中期まで、中国民衆の生活体験であった中国に固有な古いギルド（支那ではこれを「社」という）に対する彼等の生活体験とか、ある点、中共指導者層の理論とマッチするように、無数の大衆達が幻想したからにすぎない。この点、晩年のマルクスは、この拠点となるような手紙をヴィラ・ザスリイチへ書き送っている。

彼女（トレポフ將軍をピストルで打った帝政ロシア時代の婦人革命家）のマルクスへの手

紙ーロシアのミール制度（古いロシアの農村共同体）をどう考えるかーに對して、マルクスは「資本主義的な過程を経ないで眞の社会主義社会へ到達できる」と思うとハッキリ返事をしている。

フランス革命によってこゝなごに切り裂かれたかに見えた社会共同体は、その後永く資本主義及び社会主義制度の水面下に深く潜んでいた。そして埋れたものが表面に現われる度に本当は生きているのに死んだように思っていた人々を啞然とさせた。

それはソ連でも十月革命後数年間、ソ連全地域のあらゆる處に種々なるコレクティブ運動として芽を出した。殊にアメリカでは、この問題は興味ある現実的な問題提示をしている。それはケネディ暗殺犯人の処理にあたつて、地方自治体の中央権力に對する冷たさという形でチラッと姿を現わしているが、「この自治体の自己拡大」（ポール・グッドマン）の欲求という妄執が、アメリカに素晴らしい芽を含んでいる社会共同体の、眞に良い歴史的発展を邪魔していることをもっと知りたい人は、クロポトキンの『中世紀大学制度批判』（国家、その歴史的役割）をモチーフとした、ポール・グットマンが最近発表の「コンミニティ・オブスカラーズ」を読まれんことを希望する。

この論文は、人生と同じく決論らしいものをつけないままに終らねばならないが、主として、P・F・ドラッカー、B・ラッセル、及びE・フロムからの多くの助けから成っていることをおことわりしておく）

筆者